

多彩な資格取得を通して、社会人の基礎力と人間力を育む

日本工学院専門学校 (東京都大田区)

日本工学院専門学校ITカレッジ情報ビジネス科では、秘書検定とサービス接遇検定を授業に導入、取得すべき資格として設定している。検定から学生の実践的なビジネス教育とコミュニケーション力を育てられるとして指導に力を入れている。同科の指導方法や検定を取得した学生の学びや成果をレポートする。

グループワークのメンバーはランダムに選ばれる。意見が違う人や苦手な人との付き合い方も大切な学びのひとつ

ITカレッジ情報ビジネス科の風間恵先生

資格を取得して 未来の幅を広げる

今年で創立74周年を迎える日本工学院専門学校。クリエイターズ、スポーツ・医療、ITと、大きく6領域で教育を行っており、「ものづくり」の専門家を幅広く育成し、社会へと送り出してきた。ITカレッジの情報ビジネス科には主にサービス業や事務職を目指す秘書・事務コースとホテル業界を目指すホテルコースがある。学年度にはeビジネスコースがスタート予定だ。学生数は約80名。クラス担任制を敷いており、教員と学生の距離は近く、JR蒲田駅に程近いキャンパスを訪ねてやってくる卒業生も多い。「本科には『資格の取得』を目標に据えて入学してくる学生が非常に多いです」と話すのは、同校で長年キャリア教育に携わる風間恵先生。14年前の情報ビジネス科の立ち上げ当初から教鞭を執り、学生たちを見守ってきた。



情報ビジネス科では基礎的なパソコンや語学の資格、専門的な資格である簿記やファイナンシャルプランナーまで、多数の資格の取得

を目標に設定している。学生は授業の中で知識やスキルを学びながら資格の取得を目指す。「1年次はまず幅広く基礎的な勉強を行います。新しい知

識を得たり今までにない体験をすることで、自分が何に向いているのかを知り卒業後の将来設計につなげていきます。1年次の後半には就職活動が始まり、2年次には学びの集大成として、ビジネスモデルの創造やイベントの企画といった実践的な学習を行い、卒業後に役立つスキルや知識をさらに磨いていきます」。

秘書検定とサービス接遇検定は、将来確実に役立つ資格として、優先して受験していると風間先生。検定試験の学習は、授業での座学・ロールプレイングに加えて自宅でも行うことになる。学生は自宅で過去問題に取り組み、分からなかった問題や迷った選択肢、その理由を書いて次の授業時に提出するのだ。

「単なる採点ではなく、学生の疑問点に対し丁寧に解説をすることで理解が深まり、より高いレベルの問題を解くことができるようになります。初めは分からなくても、学びを積み重ねるうちに秘書やサービスマンとしての考え方が身に付いていきます」。

特に秘書検定は、卒業生のほとんどが在学中に取得しておいてよかった資格として挙げられるそうだ。

「秘書検定には、電話応対や言葉遣いなど会社に入ってからすぐに必要になるスキルが網羅されているからでしょう。席次や会食時の作法など、学生時代にはなじみがなかった、社会人のルールも実際に役立つことが多く、学んでおいてよかったと感じるようです」。

お辞儀の練習。姿勢や角度などはお互いに指摘し合って修正する



秘書・事務コースとホテルコースの学生が共同で企画したホテルプラン「餃子ルーム」。蒲田名物の餃子でホテルのインテリアをデザインした



一年次発表。プレゼンテーションの機会をできるだけ設けて、人前で話すことに慣れさせる

座学だけでなく、指導には実際に急須を使ってお茶を入れたり電話機を使って電話応対するなど、実技の練習も取り入れている。

また、ビジネス系検定の問題には、コミュニケーション力を育み、社会人としての立ち居振る舞いを身に付けられるという利点もある。同科は企業との連携にも力を入れており、授業の一環として地元ホテルに企画宣伝・運用のプランを提案したり、インターネットベンチャー企業などに学生が直接プレゼンテーションをする機会もある。そのような場面でも、礼儀やマナーが身に付いていると自信を持って一歩を踏み出すことができる。対人技能を磨いていることから、学校の顔として出向くボランティア活動や、合同説明会などで学校を訪れる企業の担当者の案内にも、同科の学生に声が掛かることが多いそうだ。

「人とうまくコミュニケーションが取れることは大きな財産になります。企業が一番求めているのはコミュニケーション力のある学生。専門的な知識は入社してから教えられるますが、コミュニケーションスキルはなかなか教えて身に付くものではありません。コミュニケーションを学ぶことができる秘書検定やサービス接遇検定には助けられています」。

検定の学びが

就職活動につながった

2年生に話を聞いた。秘書・事務コースの栗

すうだ、い、かまたきあやの、よしだだい、ひがし、のすずか、野涼香さんは秘書検定2級・3級とサービス接遇検定の準1級、ホテルコースの月間梨英里さん、奥村奨磨さんはサービス接遇検定の準1級に合格した。

昨年度はコロナ禍で、本格的に授業が始まったのは5月末。インターンシップや学外実習は実施できなかったため、例年よりもさらに資格対策に力を入れることになり、学生たちは自宅学習やオンライン授業を通して検定試験の勉強を行った。オンライン授業ではあったが、グループに分かれ、お互いに問題を出し合うなど、皆で一緒に学んでいるという一体感はあったと学生たちは口をそろえる。

栗栖さんは「まだ社会人の経験がないため、会議のときの机の配置といった実践的な事柄を問う問題には苦労しました」と話す。

「秘書検定とサービス接遇検定の考え方の違いが難しかった」と言うのは鎌瀧さん。「似たようなシチュエーションの対応でも、それぞれ重視するポイントが微妙に違うので、試験の際に頭を切り替えるのが大変でした」と振り返る。6人は共に就職活動の真っ最中。検定試験で学んだことが役立っているそうだ。

ホテル業界を志望している月間さんはサービス接遇検定準1級面接試験での経験が特に役立っている。話し方やあいさつの仕方、立ち方座り方まで、すぐに実践できることばかりだ。「面接の流れやマナーなど気を付けるべき

情報ビジネス科秘書・事務コース2年生の(後列左から)吉田大地さん、東野涼香さん、(前列左から)栗栖廣大さん、鎌瀧礼乃さん。昨年度中に10個の検定・資格に合格したという鎌瀧さんを筆頭に、2年間でできるだけ多くの資格を取得することを目標にしている



ホテルコース2年生の(左から)奥村奨磨さん、月間梨英子さん。共にサービス接遇検定準1級合格。奥村さんは準1級で優秀賞、月間さんは2級で日本秘書クラブ会長賞を受賞

学びは続く これからを豊かにするために

秘書検定・サービス接遇検定を通して得た気

点は同じ。面接官を前にしても落ち着いて応対できていると思います」と自信をのぞかせる。

吉田さんも「秘書検定で学んだ言葉遣い、そしてサービス接遇検定でのロールプレイングの経験が守りになっていきます。受験しておいてよかったと心から思いました」。

東野さんは「私はきちんとした敬語を使えるようになったことが大きいです。秘書検定で敬語をしっかりと勉強したので、自信を持って面接に臨んでいます」と成果を語る。

付きは、今後の目標や指針としても活用できそうだ」と学生たちは前向きな姿勢を見せる。

接客業を目指す鎌瀧さんは「自分の武器を増やすために学生のうちにもっと資格を取りたい」と言い、秘書検定準1級とサービス接遇検定1級にも挑戦する予定だ。「たくさんの知識を得て社会で活躍できる大人になりたい。働いてからも通信制の大学で学ぶつもりです」。

東野さんは検定を通して姿勢を意識するようになった。「以前から姿勢が悪いと言われることが多かったのですが、検定をきっかけに改善することができました。人の視線を自信を持って受け止められるのは社会人として大切なことだと思います。社会人として、いつもきれいな姿勢でいることを心掛けたいです」。

栗栖さんは、就職活動や授業のプレゼンテーションなどを通して、さらに相手に自分の考えをしっかりと伝えられるようになりたいと思うようになった。「まだ自分の考えや意見を過不足なく言葉にすることができていないと反省することがあります。自分の中だけで完結せずアウトプットして整理し、他者に伝わる表現ができるようになりたいです」。

吉田さんのさらなる目標は、敬語を使いこなすことだ。「就活に限らず今後は目上の人と話す機会が増えるはず。そのときに言葉遣いで迷うことがないようにしたい。これからも勉強を続けていきます」。

月間さんは「残りの学校生活、学べることは

全て学んで吸収していきたい。一番頑張りたいのは英語。実はあまり得意ではないのですが、海外のお客さまとコミュニケーションが取れるようになりたい。自分の武器は笑顔なので、この笑顔に英語の力が加われば、一番のおもてなしになると思っています」。

奥村さんは「私はもともと人と人とのつながりを大切にしたいです。自分の知識の幅だけではなくまだまだ狭いので、多くの人から、考え方を学びたいと思っています。そのためには、会話をするときも、相手が今どのような気持ちでいるかを考えながら聞けるとよいのではないかと。私が目指す、お客さまに寄り添えるサービスマンにもきっと必要な力だと思います」。

それぞれ意欲的に、自らに足りないもの、さらに伸ばしていきたい力を捉えている学生たち。その姿に、風間先生は1年間の学習の成果が見られると笑顔を見せる。

最後に、指導者としての思いをこう語った。「私が大好きな言葉に、一期一会があります。卒業後社会人として働く上ではつらいこともあるでしょう。そのとき助けになってくれるのが、駆け引きのない学生時代の仲間。今は意見が違ってぶつかることがあっても、逃げないで向き合い、よい関係を築いてほしい。同じクラス仲間として出会えたのは奇跡的なこと。ここで得た出会いを大切に、社会へ大きく羽ばたいてほしいと願っています」(風間先生)。